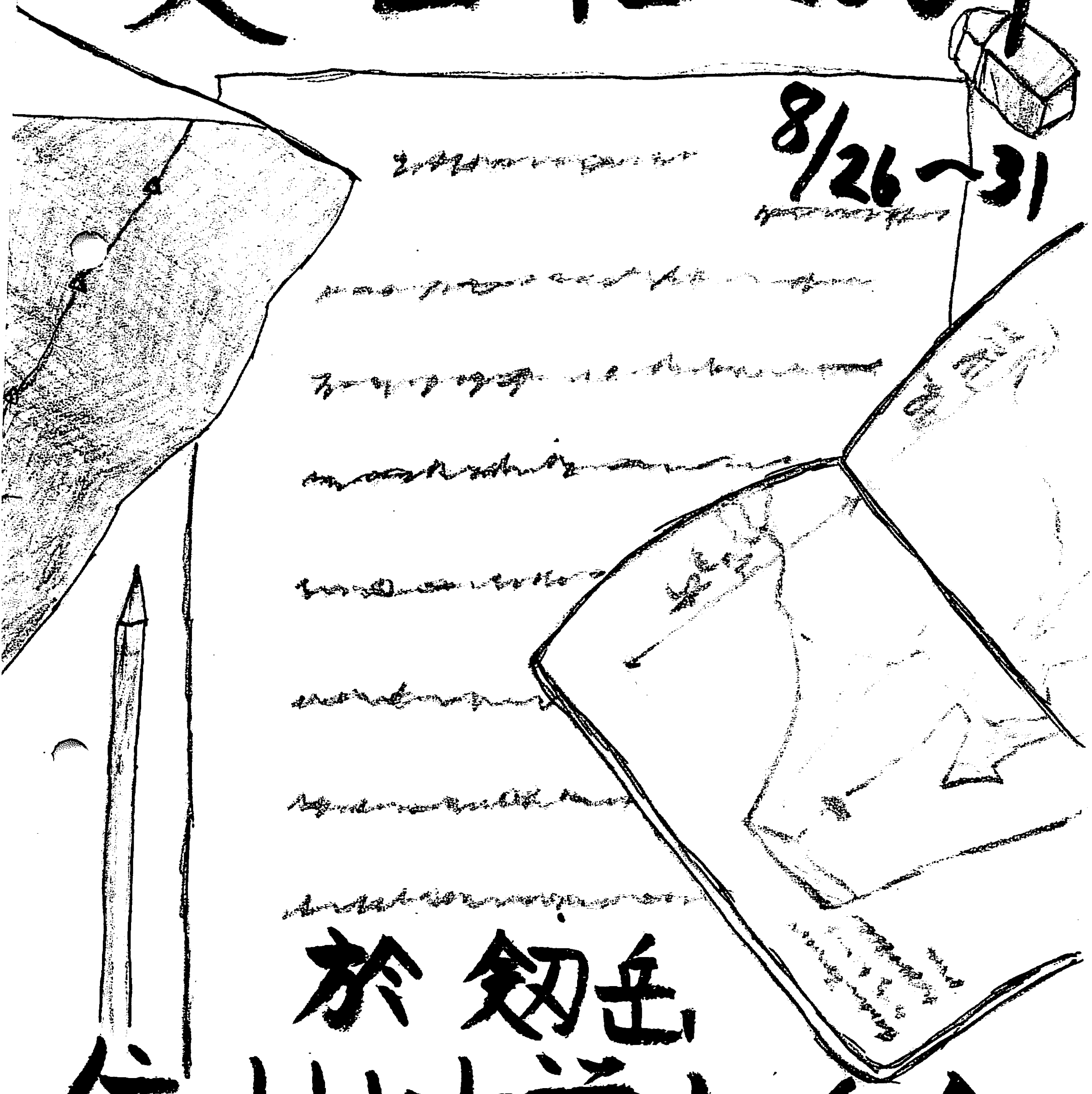
夏合宿2004

8/26〜31



於 剱岳

信州大学山岳会

目次

行動概要　P2～
個人の反省
係の反省　P6～
特別トポ　P23～

夏合宿　8/26～8/31

メンバー　L　片寄哲生(4)　高谷英太郎(3)　三森武志(3)　高橋昭彦(2)
片岡陽介(1)　佐山鉄平(1)　山中豪(1)

入山山域　剣岳長次郎雪渓～八ッ峰Ⅵ峰フェース

8/26	5:00　ボックス集合	10:05	内蔵助谷出合
	7:30　トロリーバス乗車	15:00	内蔵助平 T.S 着
	8:10　黒四ダム出発		

今年は牛4頭で出発。平日のためトロリーバス利用者が少なく、例年より気楽に乗車できた。1，2年にとって長い歩荷の始まりである。

内蔵助谷出合いを過ぎた所で、聞いていた通りの登山道崩壊を目にする。巻き道を辿るが、一箇所だけ歩荷では危ぶまれる部分がありお助けを出した。その後もきわどい崩壊地のトラバースなどが連続。下山日までに激しい降雨があれば通過は控えるべきだろう。

内蔵助平のテン場付近は昨今の台風のため記憶にある景観と大分様変わりしていた。テン場はヌカ蛾が多い上、キジ場に使われたらしくウンコ臭が。考えてみると一般者にとっては通過する場に過ぎないわけだからキジ場にするにはもってこいという訳だ。

(感想)重い！わかっていたがへバった。2回滑って、1回ザックを背負うのを失敗。何とも情けない。明日は負けん！！　佐山

8/27	3:00　起床	10:35	真砂沢ロッジ
	4:35　出発	12:15	長次郎出合
	7:35　ハシゴ谷乗越	17:30	熊の岩 B.C 着

歩荷二日目朝はもはや定番となった感すらあるマカポテを腹に詰め込んで出発。二日目になると各自の歩荷における得手不得手が観察されておもしろい。

快晴の中、地域研究をして真砂沢へ下降。相変わらずハシゴの下りがキツい。

剣沢に出ると大崩壊一歩手前といった印象の雪渓の残骸が。今年の多雨と台風の影響力、温暖化を思い知る。

ロッジから先の登山道も所々崩壊が激しく、予定外に手間取った。長次郎に突入し、石と泥とが混濁した雪渓上をひたすら登り続けた。これも見慣れた景色である。例のごとく谷の中間部辺りで雪渓が切れていることから巻き道を探すも、雪渓から右岸の岩場に乗り移るポイントすらなかなか見出せず時間を食う。無事に乗り移り岩場伝いに登ってから左岸のガレ場歩きに。熊の岩目前で再び雪渓に戻り、例年よりもかなり上部から巻くようにして熊の岩に乗り移って、4頭の牛たちは皆無事にB.C到着。

(感想)B.C に着いた時涙が出そうなくらい嬉しかった＋α剣～熊の岩に来られて本当によかったと思う景色に出会えた。夕もやに浮かぶ熊の岩のシルエットと入道雲のオレンジの輝きと月である。苦しんだ甲斐があった。　片岡

8/28　5:00　起床	6:05　出発	
三森・佐山隊	片寄・片岡・山中隊	高橋・高谷隊
7:00　V峰取付	7:10　RCC取付	7:00　Fix工作開始
8:40　登攀終了	10:25　終了	9:00　終了
9:50　岩小屋	12:00　V峰取付	9:30　剣稜会取付
10:20 魚津高取付	14:10　終了	11:15　終了
11:50　終了	15:00　V・VIのコル	12:10 魚津高取付
12:40 岩小屋	16:00　B.C着	14:00　終了
13:15 B.C着		16:00　B.C着

疲れを承知の5時起きで始まった一日。登攀初日は上級生でも緊張するものだ。各隊まずは入門ルートへ。今回ようやく正規RCCルートの概念を把握することに成功！

登攀中も長次郎下部で雪渓崩壊の轟音が聞こえる一日であった。

(感想)　歩荷明け。まるで徹夜明けのような(いやそれ以上の)疲れが身を襲う。でも壮快な登頂。アルパインていいな〜♪本当だね〜♪　片岡

8/29　4:00　起床	5:00　出発	
5:25　岩小屋着　待機		
三森・佐山隊	片寄・片岡・山中隊	高橋・高谷隊
6:00　剣稜会取付	6:10　魚津高取付	6:05　V峰取付
8:15　終了	8:45　終了	7:40　終了
9:00　岩小屋	9:20　V・VIのコル	8:40　岩小屋待機
10:20　B.C着	同左	同左

朝から霧雨に包まれて嫌な天気。とにかくアプローチしてガレ場歩きだけでもと考えつつ出発。岩小屋でしばらく様子見をし、またルンゼ状をなるべく避けたルートに変更して各隊出発。

登攀中ずっと霧に包まれたままで、いつ降り出すかビクビクしながらピッチを早めた。一本登り終えた所で天候の悪化を見込み二本目を割愛した。ところがB.Cに帰ると晴れ間も覗かれ始める。Uターンしている余裕はないので、高橋・高谷隊のみ熊の岩登攀を認める。高橋曰く、この登攀が一番よかったとのこと。残りの者は半日の沈殿を過ごした。

(感想)　今日はあまり難しくないルートでホッとしているけど、明日こそは難しくて恐ろしいルートを登らされるんじゃないかとビクビクしながらすごしております　山中

8/30　4:00 起床〜5:00 Fix 回収隊発〜7:00 本隊出発〜9:20 長次郎出合〜10:15 真砂ロッジ〜13:30 ハシゴ谷乗越〜15:15 内蔵助平の橋〜18:00 内蔵助平出合の鉄塔T.S

前夜からの気象情報によれば、大型の台風が上陸する恐れがあるとのこと。朝食後一番の気象情報を聞き、撤退を決断。すぐさまFixを回収に向かわせる。残りの者は撤収およびゴミ拾い。ゴミが出るわ出るわ。

雪渓の状態が悪いことから真砂ロッジまでは上級生も歩荷することにし荷物を等分した。雪渓の乗り移りを慎重にこなしてロッジに到着。小屋の人に一言挨拶を済ませ先を急ぐ。ここからが復路の歩荷の始まり！！

残りの食料が多いためあまり軽くなっていないため、牛たちの消耗が目にも明らか。叱咤激励しつつ歩かせた。

内蔵助平まできた所で、これから核心の崩壊地が控えているにも関わらず隊全体に気の緩みが生じていたため怒鳴らざるをえなかった。再び下り出した矢先に雨雲も前方に現れ始めた。崩壊地を通過する目前で雨に降られ、崩壊地の危険度は高くなったものの、ここまできたら急いで通過する他手段はない。テン場到着間際には一年牛３頭共々狂牛病が発症し始めたらしく、気力だけで歩いていた。稀に見る怒涛の撤退日の１シーンであった。

残りのペミカンやら野菜やら、大量に放り込んだハヤシライスを作ると上級生も総出の食いしごきと化した。消化するよりも早く眠りについたもの多数・・・。

(感想)　剣は心の準備ができないまま下山歩荷に・・・。でも僕は目覚めた！！重みは友達！いや恋人！登って喘げば、嗚呼エクスタシー。　山中

8/31　6:00 起床～7:25T.S 出発～9:25 黒四ダム着

やや遅めの起床。朝から雨である。内蔵助平は濁流、黒部川も増水していた。

雨の中撤収して黒四を目指す。途中丸山側からの水流を頭から浴びる個所もあり、降雨下の黒部の様相に心打たれつつ足を進めた。昨夜一晩のエッセンで腹に詰め込んだ分、また吸水した装備の重量化を考慮して上級生も荷物を持ったせいか、ピッチが非常に早い。１ピッチで黒四下のバラックに着いてしまう。ここからは各自のスピードでゲートまでの登りをこなして集合し、お約束の春寂寥を熱唱！今年から“雲に嘯く”に挑戦しているが、まだまだ練習不足なため、素っ頓狂な不協和音を黒部中に響かせる始末となった。

(感想)　頭からかぶった滝すごかった。危険な所は周りを見て歩こうと思う。片岡

《夏合宿総括》

まずは全員無事に夏合宿を終えられたことを良しとしよう。今年の登山道、雪渓の状況下で一たび事故となれば決して小さな怪我では済まなかっただろう。また、あの荷物を担ぎきった牛諸君ご苦労だった。あれだけ担げれば取り敢えずは胸張っていいだろう。但し、来年は更なる歩荷と新人の面倒を見るという責務が待ち構えている。それを果たして初めて歩荷卒業ということを忘れないように。

さて、今回の合宿の大きな問題は以下の４点に絞られると思う。

一、合宿前の雰囲気

これについては上級生に多分に責任がある。合宿前の緊張感を上級生がみなぎらせていなければ、一年生なんぞが夏合宿の危険さを露ほども想像できるはずがないのだから。過去の合宿において、合宿前の雰囲気作りが大事！少なくとも合宿は出発の一週間前から始まっていると思え！と度々言われてきたにも関わらずこのザマである。

兎角に立岩での岩トレだとか、フリーのグレードだとかを意識しがちになるものだ。しかし本当に大事なのは技術の高低ではないはずだ。日々の訓練で磨くべきものは、山という危険な(←これは当然なようで忘れがちな事実)場所に自分は臨もうとしている、自分は無事に自分だけの力を頼りに還って来られるだろうか・・・という山に対する畏敬の念だ。山には“事故の悪魔”がうじゃうじゃ漂っている。その誘惑に負けず、近寄らせることすら許さない気持ちを、特に合宿目前ともなれば身にまとうべきだ。

二、下山決定または天候判断

昨年に引き続きたった二日間の登攀で夏合宿を終えてしまった。果たして下山の決定は正しかったのか？標高を下げて台風をやり過ごしていればあと一日くらいなら登攀できたのではないか？色々な思いが交錯する。

今回の台風は信州付近では停滞することなく猛スピードで北上してしまった。結果としては正味一日間程度の荒れだったのだ。今回はたまたま長次郎雪渓の状態の悪さと内蔵助谷登山道の崩壊というファクターも重なっていたので、下山は正しかったと思う。しかしながら、これが未知のルートの縦走中であればどうする？一旦標高を下げて再トライできるチャンスを待つのと、完全に下山してしまうのでは大違いだ。

改めて天気の勉強の必要性、そして荒天化の対応力が不可欠であることを認識しよう。

三、敗退後の挽回

一年生は本チャン歴たったルート 3 本で留まってしまった。この時期の剣の岩場というのは、本チャン入門を最も好条件で行える格好の舞台なのだ。アプローチは近く、他の登攀隊も少ないため落石の不安も少ない。せっかく高い金を払い、重い荷物を背負い行くのだからそれだけの物を吸収して帰るべきだ。ルートをなぞるだけで登攀価値がないといいう意見は上級生だけのものでしかない。　この落とし前は今冬までにつけなくてはならない。

四、時代遅れの登攀スタイル

Ⅵ峰フェースにアブミは必要ない。不要な物を敢えて持っていくスタイルはもう卒業だ。

個人の反省

・

係の反省

夏合宿の反省と感想

片岡 陽介

今回の合宿では「自分」というものが少し見えてきたと思う。いや今まで見たくないと避けていたものに向かい合おうという気が出てきたと言った方がいいのかもしれない。もう何も隠す必要はない、素直に自分を出し、それを見つめればいいと思えてきた。して、合宿で見えた（認めることができた）「自分」というのが『かなり弱い人間だ（精神的に）』ということである。重い荷物を担ぎ長時間行動をして「限界」が見えた時（？）に「もうどうでもいいや、ここで倒れた方が楽だ。」なんて考えてしまう。それで足の置き方が杜撰になり、よく滑ってしまった。「限界」が見えた時（？）と書いたが、自分でもあれが本当に限界だったのかよく分からない。山岳会の上級生がよく言う言葉に『「限界」は自分で作るもの』とあったのを思い出す。そう考えると「限界」という概念が単に辛さからの逃避の為にある口実であり、その辛さから逃げずに耐えていれば「限界」のラインは広がると思えてくる。もちろんその「限界」が本当に体力や精神力のすれすれの限界であれば、体や精神に支障を来すのは間違いない。ただ自分で思う「限界」のラインはもっと広げられる気がする。辛さに勝てない自分がラインを狭めている。このラインを広げるには多くの「限界」を見て少しずつ広げていくしかないと思っている。上級生さん達へ…『私に「限界」を見せて下さい。（勿論合宿の時のみで…）』
それから心に残る言葉として、ある時上級生から言われた言葉で「お前、何かある（何かしでかす）タイプだよ。」というものだ。つまり事故を起しそうだという事である。自分の性格が忘れっぽく、のろいのを見て言ってくれたものだ。確かに山では生きられない性格かもしれない。でも山に登ってなおかつ生きて帰りたい。だからこれを改善しちゃる！

ところで今まで辛い事ばかり書いてきたがこれからはさわやかな気分になった…ことを書こうと思う。長次郎雪渓の登りはしんどかった。しかし、熊ノ岩に着くと心做しか心地好かった。何故かは分からなかったがとにかく快さが全身をかけめぐった。疲れもすうっと消えていた。そして涙をこらえるので喉が痛かった。喜びなのか又は悔しさなのか分からないが喉が詰まった。今考えると途中挫けそうな自分がいた様な気がする。だから半分悔しさも混じった涙だったと思うのだ。そして水を汲んでいる時、ふと熊の岩を見上げると、なんという姿！まさに巨体を倒さんとしている熊である。それも橙に燃える夕靄の中、悠然と佇むあの黒い巨熊であった。いつも通りたっぷり食いしごかれ、その膨れた腹をかかえ、小便に外へ出る。月に照らされた青白い空気を八ッ峰が貫く。そして月光が岩肌を舐める。あの静寂の世界、まるで動くものは自分だけの様な錯覚に陥る。すごく澄んだ世界に今、自分はいるのだと思った。

この時、「ああ、ここへ来てよかったなぁ…。」と思った。
次に登攀についてだが、初めて、いや再びおもしろいと感じた。リードをやったわけではないが、道具を駆使して登ることにおもしろみを覚えた。かつて人工壁をやったことがあったが、少しして飽きてしまった。だがあのザイルや、ナッツ、ハーケンといった単純な道具に命を預け登るというその微妙な賭けにおもしろさを見つけた。早くリードができる様になって自分もその賭けに参加したい。
いや～それにしても山の水はうまい！

<反省・感想>

最も大きな反省は夏合宿に気持ちが向かなかったことである。出発前の岩トレでリーダーに「夏合宿に行く気があるか？」と聞かれ、その返答に戸惑い「行きます。」と口に出したが、合宿に集中出来なかった。ザックを担ぐときにバランスを崩したり、アイゼンをはいてガレ場を歩いていて転んだり…上級生のビレイでも単純な義務感で動いていたように思える。夜に一人で月を眺めていた。台風により予定を短縮して下山することになったが、悔しさなどの感情は全くなかった。行きに比べて多少は軽いものの帰りも歩荷となり内蔵助谷の出会で幕営したが、その１Ｐ前に自分の団装をバラす事となった。複雑な感情とともに涙がこぼれた。

佐山　鉄平

夏合宿 反省・感想

山中 豪

反省

まず思い返されることは行きの歩荷では一度もサポートなしではザックを背負えなかったということだ。段差があれば腕を通してから立ち上がればよかったが、平らな場所ではまずザックを膝まで持ち上げることすら難しかった。膝まで持ち上がってもそこから腕を通すとバランスをくずしてしまい、背負えなかった。筋力やテクニックもたりなかったが、一番たりなかったのは気合だったと思う。ザックを背負いそこねると事故につながることは今合宿で再認識させられた。またすんなりザックを背負えないとピッチの出足をくじくことになる、これからはザックを背負う時は常に失敗は許されないという緊張感と絶対に背負いきるという気合を持とうと思う。

また、今回の合宿ではパッキングの重用性もあらためて理解した。歩荷中背中や首にゴツゴツしたものがあたり苦しんだピッチが何度かあった。また、上級生にパッキングを見てもらい手直ししてもらった時などはほんの一違いでうまくつまるものだなと感動した。パッキングに関してはこれから毎回できるだけ考え、時に新しい工夫をしながら自分なりに極めていこうと思う。日々精進

あと一度登山道で大きな落石をしてしまった。土の中にうまっていると思い足を置いたら落ちてしまった。もっと石を見る目を身につけなければならないと痛感した。下に人がいたらと思うと恐しい。

感想

今回の合宿のメインはやはり歩荷と登はんだと思う。
登はんでは全部で3本と少ないが、あまり怖い思いをせずにすんでよかったというのが率直な気持だ。正直僕はまだアルパインクライミングが怖い、ただ今回は快適なルートしか登らなかったせいかいつもよりも楽しかった。また、様々なギアや自然物でとってある支点におもしろさを感じた。あとは事故がおこらなくて本当によかった。

歩荷に関しては今回は登はん日が少なかった分夏合宿イコール歩荷のイメージが強くなってしまった。出発前は担ぎきれるだろうかと不安でいっぱいだった。実際かなりこたえた。
1日目はとにかく重圧がキツかった。これは腰をやっちゃうんじゃないかなと思うことが何度かあったがバンテリンを多用することでのりこえた。バンテリンはボクの心の友だ。2日目はいくらか重さにもなれてきたが、やはりつらい、長次郎も最初はいけるかと感じたが、後半かなりきて、雪渓から熊の岩の平地にわたった時目が遠近感を失なったように感じた。これがめまいというものなのだろうか。そして帰りの歩荷で僕はとても大切なことを悟った。そう、重さは友達なのだ。ある時ザックを背負うと妙に重みに親しみを感じた、その時に僕は気付いたのだった。それからは登りが妙に楽しい、肩や腰にかかる重みが登りたいと僕に語りかけてくるのだった。
これは自分自身重みを友達に感じるだけでこんなにもつらさが違うものなのかと素直におどろいている。ただもう1度同じ重さをせおった時に同じように感じれるかはわからない。もしかしたらザックからつき出した角が僕の脊椎を刺激して何かの脳内物質を分泌させていたのかもしれない。とりあえず貴重な体験だった。

今回の合宿で何を得たかというと僕は少しの自信を得たと感じる。歩荷をかつぎきったこともそうだが、歩き方、危険箇所への注意も少しづつだが上達したように感じる。これからも自分で考え判断できるようになるようにいっそう気を引き締めようと思う。

夏合宿　反省・感想

徒然なるままに

高橋昭彦

山はなんと言っても天気が一番だ。特に今年に入ってからそう思うようになってきた。寡雪によって雪渓はズタボロ。豪雨で登山道は崩壊。そして止めの台風。熊の岩で直撃を食らったらただでは済まなそうだし、大雨の後に内蔵助谷は死んでも（というか行ったら死ぬ）通りたくない。悔しいけれどあの状況では降りるしかなかったのだ。特に帰りの雪渓を見て、その思いは確信へと変わった。…と頭では理解しているのだが、やはり敗退は悔しい。ここまで悔しい春寂寥は初めてだ。

そんな訳で今回は、去年と同じく殆ど登攀ができなかった。チンネにも結局いけずじまい。来年は一年を見なければならないのに、こんな少ない本数でいいのかと思ってしまう。ただ、最後に熊の岩に登らせてもらったのは良かった。後述するがあれこそが自分の求めていたクライミングであった。

天気にばかり愚痴を言っても仕方ないのでまずは個人的な反省と感想を。

今回は牛対人の割合が去年より少なく、重くなることは目に見えていた。案の定担いだ重量は過去最高。本当に熊の岩に辿り着けるのかと思っていたが、何とか全員ばらさずに担ぎ上げられたことについては満足している。しかし、自分の歩荷に精一杯だったために、ルーファイや一年を見ることは上級生に頼ってしまった。また、判断についてもついつい上級生に聞いてしまうことが多々あった。人数が少ないこともあるし、これらを克服しない限り冬合宿のような厳しい合宿では役立たずになってしまう。あの程度の歩荷でめげない体力と、積極性を身につけることが今後の課題であろう。

メインの登攀に関してだが、何と言っても熊の岩でのクライミングは最高だった。去年佐藤さんが登った所を辿ったようだが、あれほど充実した内容のクライミングとは思わなかった。オールNPで、それが取れない所ではランナウト。オールフリーで抜けられるし、ライン・ロケーション共に申し分ない。初めて登っている自分に惚れた。Ⅵ峰なんか登っているよりよほど内容が濃いと言っても過言では無い。また、歩荷中当然のことだが一年に負けられんと思ったし、彼らの頑張りに正直安心した。J走は荷物が軽く天気も良かったために、ある程度運が良かったと言われる覚悟はしていた。しかし、今回の歩荷でJ走の成功は決して偶然ではない、ということを確信できた。このまま彼らには更に上を目指して欲しい。ただ、生活や行動面でもう少し厳しくした方が良かったのではなかったかとも思っている。これらのことは9・10月の山行で付けていって欲しい。

さて、本題に移るが夏合宿の最大の反省は、出発前にあった。去年も「合宿は一週間前から始まっている」と言われたが、今回はそれ以前の問題だった。上級生・一年共に気の

緩みがあったし、技術面、また下界での生活とどれを取っても最低であった。その原因を挙げると、

① 在松の上級生の怠慢

② 非松本組のサポート不足

③ 片寄リーダーの統率力不足と三森サブリーダーの意識の低さ

④ 山岳会全体の意識の低さ

大きくこの四つにあると思う。

まず①についてであるが、自分も直前に知ったことなので正直あきれた。僕は諸々の事情（通松）で毎週金曜は松本に来るが、そこで生協に行った時古賀さんによく言われた言葉が「最近岩トレやっている？」であった。僕はBOXの黒板に岩トレについて書いてあったことと、直接関与していなかったこともあり曖昧な返事を返し、それについて探ろうともしなかった。しかし、実際岩トレは古賀さんのおっしゃる通り行われていなかったのだ。天気による中止の連絡の不備。上級生の寝坊や遅刻。このような醜態を晒していては、一年がだれるのは目に見えている。そして、上級生がなめられるのも。高谷さんにいたっては、連絡してもつながらないのが当たり前というレッテルを、上級生はおろか一年にまで張られているのを本人は気付いているのだろうか。正直3月の中アの反省を彼は生かしているのだろうかと疑いたくなってしまう。上級生がそのようなことをしていては一年の遅刻や欠席を言及できないのも当然だ。J走の一年を見て「こいつら甘やかされているな」「なんでこの程度のことができないのか」と思ったが、案の定松本はだれていた、ということだ。まあ、それが合宿前に発覚したのだからまだ良い方だが。松本にいる上級生は、一年の山岳会における人間形成を大きく左右する、ということを強く自覚してもらいたいし、このことは一年も覚えておいて欲しい。

①の原因の一端は②にもある。僕と片寄さんはそれぞれ伊那と上田だが、松本の二人の負担を分かっていないということだ。去年松本の上級生は3人いたが、今年は2人。当然岩トレは彼らだけで回さねばならず、その負担は想像を絶するものだろう。更に印刷や郵送などの雑務をこなさねばならないから、負担は増大する一方だ。それを考慮して、山行を組んだり空いた土日で岩トレをする。また松本での作業を手伝うなど、もっと二人をサポートすべきであった。その点では松本組に頭を下げる思いである。後期にどのような面でサポートしていくかが僕らにとって最大の課題だ。

次に③だがこれについては3月の中アの時点で感じていたことだ。片寄さんは細かいところにも目が行くし、技術や体力については僕なんかどうこう言えないくらいあると思う。しかし、唯一物足りない点を挙げるとすれば、人を引っ張っていく力であろう。僕もそうであるが、片寄さんはあまり人に物を言わない人間だ。人に対してなるべく物を言わず自分の行動で相手を動かせる、というのが一番の理想だし、僕もそうありたいと思っている。しかし、実際厳しい山に行けば行くほど、必要なのは人を引っ張る力だ。来年三森さんがリーダーになるということもあって、松本のことには最低限のことしか触れていなかった

ようだが、もっと自分が前面に出て山岳会を動かしてもいいと思う（それをさせる他の上級生も終わっているのだが）。冬合宿では更に修羅場が出てくると思うが、そこで隊を引っ張れなければリーダーとして終わりだろう。幸い内蔵助平でだれていた僕らを一喝したのを見て、正直安心したが。また、三森さんは少々発言や行動が軽率ではないかと思う。リーダー会でもあったが、今合宿中（特に歩荷の時）の発言は下級生からの信頼を失わせているものである、ということを理解して欲しい。また、こんなことは口にすべきことではないが、非松本組も（特に車が無い人間は）移動やらなんやらで週末の時間はかなり制約されているのだ。僕らが松本組の苦労を汲んでやれなかったのは大きな反省であるが、前期の発言の数々に正直閉口した。中アの時に比べればだいぶましになってきたが、どこか子供っぽさをかんじてしまう。一応本人も自覚はしているみたいなので大丈夫だとは思うが。

④については個人的に感じていることなのだが、現役の岩や壁（ここでは人工壁のことを指す）に対する意識の低さだ。それを強く感じたのが、夏合宿前に人工壁に行ったときである。ぶっちゃけて言うと今の現役はフリーをなめているようにしか思えない。ろくに準備運動もせずに登り始める。ビレイはいい加減。特に3・4年にもなってそれを平然としているのだから僕にはそれが信じられない。だいぶ前に今の上級生とフリーやボルダーに行ったときも、登る前や登っている間も邪魔された記憶がある。僕はクライミングをインドアの、しかも初めはコンペのためにやっていた人間なので（今はそんなことは無い）感覚がずれているのかもしれないが、目の前に広がっていたのは強くなろうとしているクライマーではなく、恥ずかしい自称アルパインクライマーの図であった。この時は立岩が雨で中止だったので人工壁に行ったわけだが、だからといって気を抜いていいのだろうか。確かに本チャンで落ちることは許されないし、立岩でも当然その心掛けで登るべきだ。ザイルを結び合うということは、フリーのビレイを気軽にするのとはまったく違う意味を持つ。ではフリーで気を抜いて良いのだろうか、僕の答えはNOだ。これは言い過ぎかもしれないが、僕はフリーの岩や壁の方が下手な本チャンよりもよほど緊張する。なぜなら前者は落ちるかどうかの限界間際のクライミングをするのに対して、後者は落ちられないクライミングであると同時に落ちるはずのないクライミングだからだ。人工壁はおろかクレッタすらなかった時代、僕らが簡単に登れるルートは非常に困難なクライミングであったろう。しかし、今となってはメジャーなルートの殆どは、残置のあふれたただの登山道だ。前述のような道具やNPの登場でクライミングのレベルは一気に上昇した。しかし、今の現役は道具の進歩に寄りかかって、自分の限界を押し上げる努力を怠っているように思える。いつまでたっても同じグレードしか登れず、だめならA0やA1（リードがフリーで行ったところでさえも）することが恥ずかしいと思わないのだろうか。この際だからはっきり言わせていただくと、上級生は本気でクライミングに取り組む気が無いのならクライミングには二度と行かないでほしい。その方が一年生に変な影響を与えないし、限界を押し上げようとしてきた先人に対しても失礼ではない。山を登る実力に関して言えば、上級生の方

がはるかに上だ。しかし、今の上級生にクライミングが強くなりたいという意志は全く感じられない。良いルートやクラシックルートを味わって登る。これは本当に強いクライマーが言うからこそ言葉に重みが出てくるのであって、そういったところしか登れない自称クライマーが言っても軽薄にしか聞こえない。まあ、冬に関しては僕は何ともいえないが。なんにせよ我々は登れないということを強く意識しなければならない。山岳会の登りしか知らない人間は、何年であっても所詮は井の中の蛙なのだ。

④はあまり関係ないが、今山岳会について感じていることを書かせていただいた。僕の信条はとにかく行動で示そうとする性質で、言葉ではあまり言ってこなかった。しかし、今回ばかりは自分のことを棚に上げて色々書いた。各々異論はあると思うが、自分なりに感じていることなので特に上級生３人は真摯に受け取っていただきたい。そして、こうした戯言を実力でねじ伏せてほしい。

最後に蛇足ながらもう一つ。８月の２つの山行ではっきりしたことは、自分の山に対する方向性は山岳会の方向性とかなりかけ離れてきている、ということだ。どちらが良いというわけではないが、少なくとも自分の山を求めれば求めるほど他の人とはかけ離れていく気がする。会を築いてきてくださった幾多の先輩方には申し訳ないが、もし自分が異端であるのなら異端のままでよいと思っている。今回の合宿で、自分がどのようなクライミングを求めていたか分かったつもりだ。あとはそれに努力していくのと同時に、会の一員としての役割を果たすのみである。

中アの時に上級生に対して思ったことは各自自覚していると思ったし、言いもしなかった。しかし、そのときの反省は今になっても誰一人として生かしていないと思う。今回はまだ良かったが、次にこれを生かせなかったとき、今度は死人が出る。冬合宿はもう始まっているのだ。

ナカハタ T

SAC expects everyone do them duty.

反省・感想　　　　　　　　　　高谷　英太郎

今回の夏合宿は、入山前の問題が多すぎた。自分は松本組の上級生として、役割を全うできずその責任を痛感している。今年の松本組の上級生は2人だけだが、その事は言い訳にはできない。全ては自分達の甘えによるものである。冬に向けて、気合を入れなおし出直すのみである。

会全体を見てみると、松本組と非松本組のコミュニケーションが今年は大変不足していると思う。下界だけでなく山の上でもだ。この様な状態だと、極限の状態になった時会としてそれを乗り越えることができないし、一緒に山に登っていても楽しくない。改善せねば。

最後に、夏合宿自体に触れると、正に欲求不満であった。アプローチに難がある剱は、どうしても、それがために、トハン日数が少なくなる傾向がある。トハンだけを見れば場所を変えた方が良いとは思うが、アプローチも含め山としての剱の魅力も捨て難い。夏合宿の意義をどうするかを良く考え、これから柔軟に対応していくべきであろう。

夏合宿の反省・感想

三森武志

今回の反省は合宿中よりも、むしろ入山前にあった。岩トレに遅刻・寝坊するという上級生にあるまじき行動を取ってしまった。一年に対するその影響ははかりしれないものだったと思う。実に軽率であった。自らの行いで失った信用は、これからの行いを正し、それによって取り戻したい。入山中は、これといってないが、積極性と判断力がまだ足りないように思う。もっと多様に山に登るべきだろう。

下山については、仕方がないように思う。登山道の崩壊と、連日の悪天。特に近年は合宿と秋雨前線が重なるので、入山時期を検討してもいいと思う。登れない夏合宿では担ぐ1、2年があまりにもむくわれない。

夏合宿反省・感想　　　　　　片寄哲生

まずは無事に終えられたことを本当に感謝している。今回の剣周辺の状況では不安を抱かずにはおれなかった。一時は長次郎雪渓の崩壊が原因で夏合宿を諦めるしかない事態すら想像したものである。総括に記したように、宿題を多く残した夏合宿の終わり方となってしまったものの、それでも全員無事に合宿を終えるという当然なようで難しいことがまた一つクリアできたことがうれしい。

反省点としては、自分がリーダーとして甘すぎる、優し過ぎるということだ。今のリーダー部員には一年生そして自分に“アメ”をくれる奴はいても、常にピリピリしたオーラを放って怒鳴りまくる存在がいない。ここは一つリーダーたる自分がそうした存在になるべきだと思う。　なよっちい関係ならいくらでも築ける。厳格な関係の中でこそロープを結び合える。そんな関係を今の山岳会に創りたい。

はっきり言って今回の夏合宿には全く納得できない。登れた本数は少ない上に行きたかった諸ルートを一年生に見せられなかったばかりでなく、自分も楽しみにしていたルートも取り付く事すらできずに敗退したからだ。しかしその代わり、自分なりのアレンジをこめて10月中の個人山行でリベンジを期すことを思いつけた。かなり贅沢な計画なので、食欲ばかりが先走っていそうで心配だが、消化能力も十分備えて臨み見事“完食”と洒落込みたいものである。

無雪期の山も間もなく終わりを告げる。いよいよ冬がやってくるよ〜〜。

さあ気合入れてがんばろう！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

エッセンの反省

三森

3年目にして初めてのエッセンだったが、量、質ともに、あまり問題はなかったように思う。しいて言うなら、目新しさが全くなく、面白みに欠けたように思う。新人合宿で高橋が大量の野菜を余らせていたので、それだけはやるまい、ということばかり考えていた。今回は途中下山だったので、それほど気にならなかったが、一週間似たようなメシ(ルーのみが違う)だとさすがに飽きがくるかと思った。何といってもなんでも持っていける?夏合宿なのだから食にも彩りが欲しい、なんて思うのは余計なお世話か?たくさん食えればよいですか?

夏合宿、装備反省　担当 高橋

・装備(登攀具)の再検討を

アブミ、IV峰には不用。アルパインクライマーよ アブミを捨てよ!!

ボルト、ハーケン多すぎ、少なくともFIXはハーケンと腰ひもで十分。ルート上にボルトを打つことも有り得ない & 時代遅れ。ボルトは使用するとしてもレスキューくらいか(レスキューもプロでなければ壁では不可能と思われるが)。セルフレスキューできない奴は岩に行くなと言われそうだが

・合宿前・後問わず紛失物が多すぎる。特にビナ・シュリンゲ。装備ノートを作成して使用する度に記入をする。

・新品のシュリンゲはほどけて紛失しやすい。三岩で慣らせるべき。

・ザイルの半分印はテーピングで。ボールペンはすぐ消える。

・個装ヌンチャクをバラす場合は個装テープで用意する。

・ダンロップを夜なべとして修理したのは正解。これであと2,3年は使える。皆の衆感謝せい。

・FIXロープはあと25m。若しくはどれをどこに使用するかを考える。

・残置シュリンゲが多い場合は、不要なものを切って設置し直した方が良い。

・おまけ、エロ本隠しの罪は非常に重いので片岡・三森さんは覚悟しておくように……。次やったらすごいことしますよ。

HOHO.T.

＜記録係＞

到着時間と天気ばかりに気をとられ、コースの様子や雪渓装備の脱着場所などを記載しなかった。つまり、全く役に立たない記録を取っていたと言っても過言ではない。また、感想を書いてもらうために記録帳をまわしたが上級生にも行き渡る様に配慮すべきであった。時間に関しては記憶しても忘れてしまうことがあるので、できる限りその場で記載すべきであった。

佐山　鉄平

《会計係の反省》
まずは会計報告

入金		17000円×7名＝119000円
支出	食料および装備類	76450円
	雑費	3534円
	トロリーバス往復	1260円×7名×往復＝17640円
	荷物チケット往復	210円 ×7名×往復＝2940円
	自動車ガス代	2000円/台×2台＝4000円
	支出計	104564円
残金		14436円

残金は合宿終了夜の食費に当てられた。

反省点：①各自、支度の朝までにはきっちり金を用意してもってくること！
②ボックスの装備類は大切に保管するよう努めるべし。今回の出費の数%はボックスで紛失したと思われるシュリンゲを補うためにあてられている。

《渉外係の反省》
・真砂沢ロッジにあらかじめ登山道などの状況を確認するのはとても役に立つ！お礼の品を欠かさずに持っていこう。先輩たちが受けた恩義は山岳会が受けた恩義だ。
・フルーツなど、牛さんたちをねぎらう差し入れは合宿費からだしてもよいので買っておくべきだ。歩荷隊はいくらレーション昼飯あっても足りないもの。
・ トロリーバスの乗車に荷物券が必要になったのは予定外。
・ その他特に反省点なし。

特別トポ

熊の岩

夏の旅人達に贈る歌〔3級上　V～V＋　125m　1．5～2時間〕

熊の岩の末端から頭まで直線的に突き上げているルート。ライン、ロケーション共に申し分なく、しかも終了点には楽園が広がっている。しかも岩が硬く（2，3P目は脆いが）残置も殆ど無い。したがって支点、ランナーはすべて自分でセットするか、取れないところはランナウトする。特に2P目以降はフォローも下手に落ちられない。もっとも今日のクライミングのレベルから考えれば登れて当然なので、それほど怖い思いをすることは無いと思う。また、残置は無いが登るラインは岩が提示してくれる。岩を見上げ、そこを登り、降りてきて自分が描いたラインを見上げる、というルート図なんかに頼らない健全なクライミングが楽しめる。少なくともⅥ峰よりよほど内容は濃い。当然のことだがボルトや残置は厳禁。ここではそういった登り方を楽しむ場だ。グレーディングについてはRCC体系は良く分からないので参考程度にしてほしい。アプローチは熊の岩B.Cから1～2分。

〔1P目　Ⅲ、　40m〕
熊の岩の末端より右の凹状クラックから取り付く。ビレー点はカムとナッツ。二本のクラックを使って直上し、途切れたらスラブを左上。感動的に硬いスラブだが、支点は取れない（気休めにナッツが決まったが）。まあ落ちるほど難しくは無いのでそれほど怖くは無いが。残置ハーケンが一枚ある部分をビレー点とする。が、あえて残置は使わずナイフ2枚とカムで支点にする。この先も残置は一切使用しなかった。

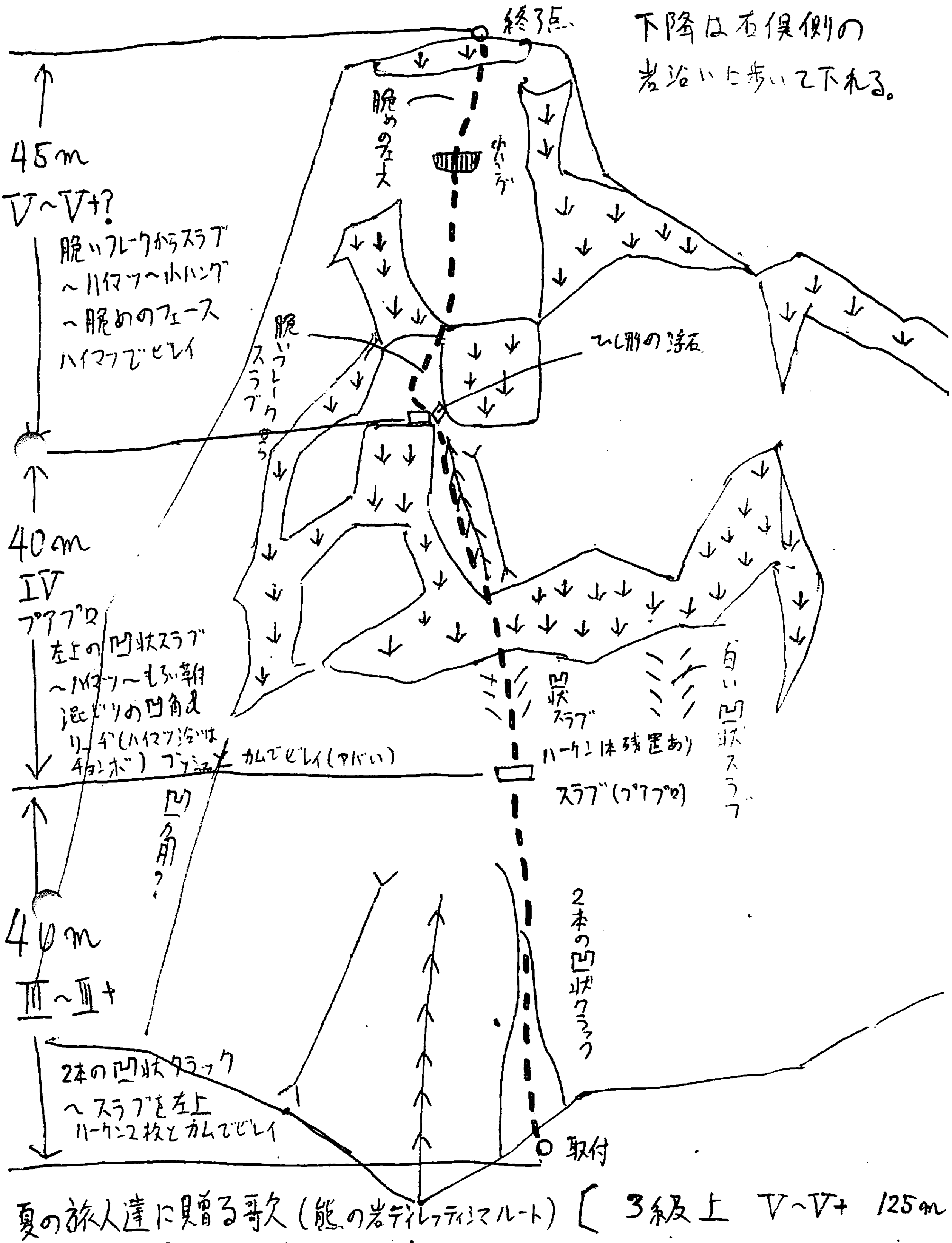
〔2P目　Ⅳ、　40m〕
ビレー点から左上の凹状スラブに向かって左上し、ハイマツに突撃。その後は脆目の岩と草付混じりのクラックとリッジを使うか、ハイマツの際をいく。前者はランナーは取れないが面白い。ビレー点はひし形の浮石の付近。ブッシュをスリングで束ね、ついでにカムで補強したが絶対落ちたくない代物。アンカー、ランナー共に信用ならないので、B,Cにビレー点ごと帰りたくなかったらリードフォローとも落ちちゃだめ。

〔3P目　V～V＋（?）　45m〕
ビレー点左の脆いフレークから登り始めスラブ、というかフェースへ。ハイマツを突破して核心の小ハングへ。カムが何箇所か決まるが、核心手前には何本か残置ハーケンがある。ハングは左から巻き気味に行けばさほど難しくない。最後は脆めのフェースを登りはハイマツを抜けて終了。ビレーはハイマツで。天気がよければ最高の景色が広がっているので一息つきたいところ。下降は右俣側の岩の基部を通ってクレッタのままB,Cに帰れる。

ギア　カム１セット（エイリアンから３番くらいまで）、ナッツ１セット、ナイフ×２（不安なパーティーは多めに）、伸ばせるヌンチャク・スリングは使える。残置には頼らない方がいいしその方が楽しい。山頂用おにぎりがあると幸せ。

ルート名についてだが、ここは去年佐藤さん達が行っているし、岩があればどこでも登っていた志ある人たちが、昔から登っていたように思える。だから僕なんぞに名前をつける資格は無いだろう。ただ、トポを書くにあたってラインをはっきりさせたいので区別する意味でもあえてつけさせていただく（まあ熊の岩ダイレクトでいいんだろうけど）。そんな訳で僕にとって最高の岩を最高の状態で残してきてくれた先人に敬意を表す、と共にこの登攀の喜びを志ある未来のクライマーに残していきたいという思いから『夏の旅人達に贈る歌』とした。

高橋昭彦　記



夏の旅人達に贈る歌(熊の岩ディレッティシマルート) [3級上 V~V+ 125m
2~3時間] 2003夏合宿、佐藤、富中、小尾、2004夏合宿 高橋、高谷(オールフリー)
用ギア カム1セット(キャメロットは#3まで、エイリアンがあると心強い)ナッツ1セット。ナイフ×2(多めに持っていくと安心。山頂用おにぎりがあったら幸せ(かも?) 基本的にオールNPとランナウトで行ける筈。ボルトは打ち首!!

SAC